

令和 5 (2023) 年度  
一般選抜前期日程 (福祉情報学部) 試験問題

# 小論文

## 注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないで下さい。
- 2 解答はすべて解答用紙に記入して下さい。
- 3 解答には鉛筆かシャープペンシルを使用して下さい。
- 4 問題は全部で6ページあります。
- 5 試験時間は90分です。
- 6 試験終了後、問題冊子も回収します。
- 7 何か伝えたいことがあるときは挙手して下さい。

第1問 以下の図表は子どもの貧困に関する統計調査から作成されたものである。この図表から読み取れることを300字以内で記述しなさい。

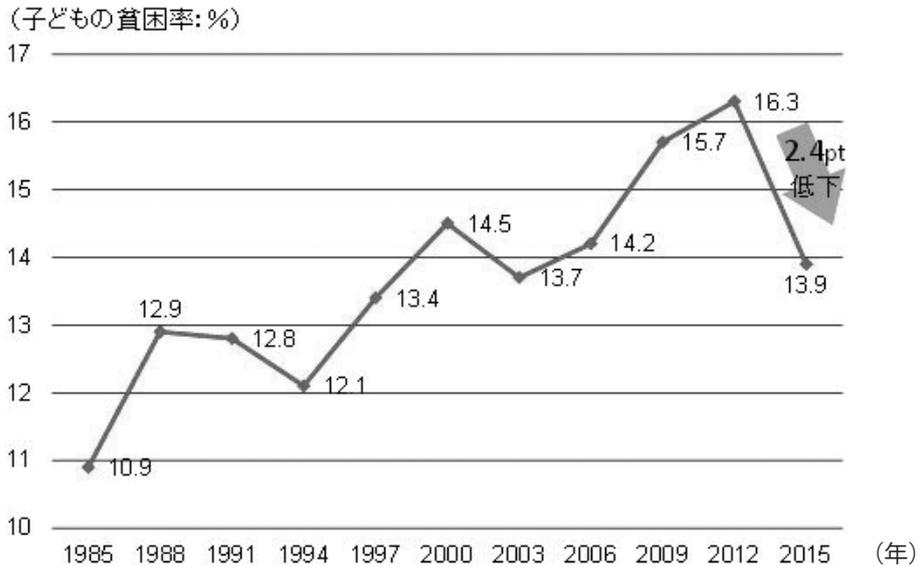


図 1-1 子どもの貧困率（相対的貧困率）の推移

(出所) 厚生労働省「国民生活基礎調査」より三菱 UFJ リサーチ&コンサルティングが作成  
(注) 17歳以下を子どもと定義している。

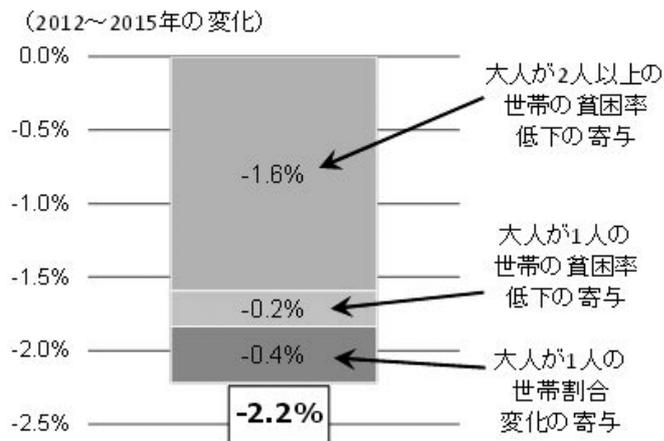


図 1-2 子どもがいる現役世帯の貧困率の変化の要因分解

(出所) 厚生労働省「国民生活基礎調査」より三菱 UFJ リサーチ&コンサルティングが作成  
(注) 本来は交絡項もあるが、非常に小さい寄与であるためグラフでは加味していない。

表 1-1 子どもがいる世帯の平均所得金額の変化

(単位：万円)

	総所得	雇用者所得	児童手当	その他 社会保障 給付	その他 所得
2012年	673.2	574.1	19.6	32.7	46.8
2015年	707.8	609.9	14.1	30.3	53.5
変化額	34.6	35.8	-5.5	-2.4	6.7

(出所) 厚生労働省「国民生活基礎調査」より三菱 UFJ リサーチ & コンサルティングが作成

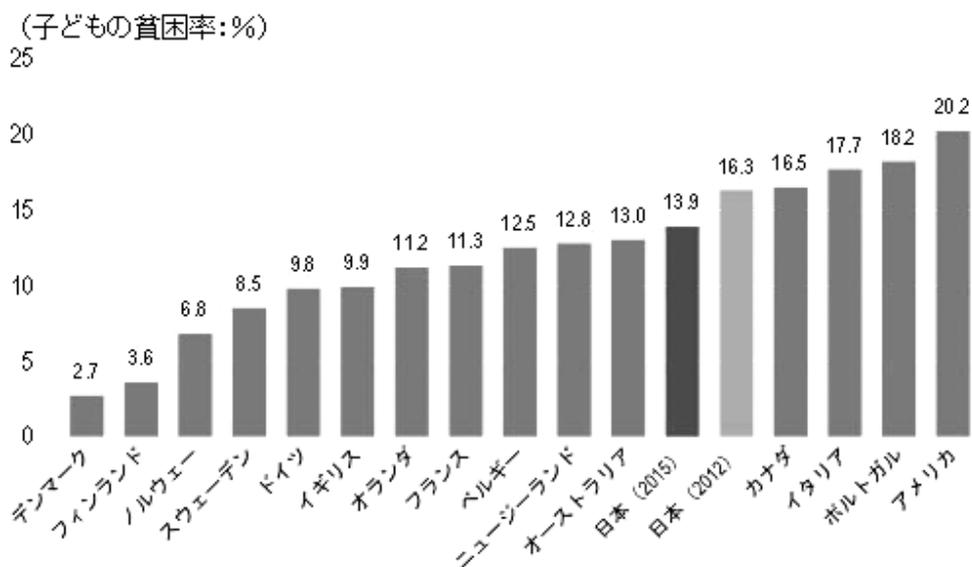


図 1-3 子どもの貧困率の国際比較

(出所) OECD Statistics より三菱 UFJ リサーチ & コンサルティングが作成

(注) 2012 年以降の最新年の数値であり、各国ごとに時点は異なる。

第2問 以下の文章は、濱島淑恵『子ども介護者』の一部である。これを読んで、続く問いに答えなさい。

### 「ケア」は多面的だ

最初に、ケアという言葉について説明しておきたい。タイトルでは「介護」としたが、文中で用いているように本来は「ケア」という言葉の方が適している。「ケア」は「介護」という言葉が想起させる身体的な介護よりももっと広い意味を指す。

料理、洗濯、掃除といった毎日の家事、年下のきょうだいの世話、感情的なサポート、話し相手、買い物、重い物を持つ、通院・外出の介助や福祉・医療の専門職とのやりとり、日本語通訳や手話通訳なども入る。全般的な世話をイメージしてほしい。

介護・育児の経験がある人ならおわかりだと思うが、高齢の家族や障がいをもつ家族の「介護」と言っても、それは身体的な介護だけでは終わらない。声をかけながら、随時、様子を見守り、身体的な介護もするし、その家族のために料理、洗濯、掃除もする。

福祉や医療のサービスを利用すれば、病院や施設とのやりとりが必要になる。時には話し相手になり、感情的に支えることもある。これらはすべて一連のものであり、切っても切り離せない。本来、介護とはこうした「全人的なケア」を意味するものである。

このようなケアを担う子どもたち、「ヤングケアラー」の状況は実にさまざまである。認知症の祖父母を親とともに介護する者もいれば、精神疾患の母親の代わりに家事や年下のきょうだいの世話をする者もいる。またアルコール依存の父親を感情的にサポートしたり、障がいをもつきょうだいのケアをする者もいる。

(中略)

### ヤングケアラーがいる家族の傾向

ヤングケアラーはさまざまなタイプの家族にいるが、「祖父母とひとり親（父）と子」が最も高く、次いで「ひとり親（父）と子」「祖父母とふたり親と子」「祖父母と子」となっており、いずれの存在割合も10%を超えた。また、「祖父母とひとり親（母）と子」でも10%に近い存在割合であった。

(中略)

日本全体でみると、三世代世帯は減り続け、「2019年国民生活基礎調査の概況」（厚労省）によると、2019年では全体の約5%にとどまる。しかし、ヤングケアラーは祖父母と同居する世帯に多いことが私たちの調査ではみえてきた。また、国の調査では、三世代の世帯では祖父母のケアが最も多いという結果も示されている。

祖父母と同居し、祖父母がケアを要する状態であれば、孫は自然とケアを手伝うことになっていると思われる。しかも、ひとり親の場合、祖父母のケアと仕事と家のことに追われる親をみて、孫に当たる子どもがケアを担うようになることは、必然に近いと言えるかもしれない。

また、ひとり親の世帯では、ケアを要する家族がいる場合、家庭内で一種の労働力不足が生じているのではないかとすなわち、家事、ケア、仕事をひとりの親が担うことは容易ではなく、ましてその親自身がケアを要する状態であれば、子どもが一定のケアを担うことは必然となる。

表 2-1 家族形態別の存在割合

家族類型（全体の人数）	ケアをしている者（ヤングケアラー）の人数（％）
ふたり親と子（3677）	147（4.0）
ひとり親（母）と子（691）	38（5.5）
ひとり親（父）と子（117）	15（12.8）
祖父母とふたり親と子（361）	39（10.8）
祖父母とひとり親（母）と子（156）	13（8.3）
祖父母とひとり親（父）と子（35）	5（14.3）
祖父母と子（28）	3（10.7）
その他（139）	10（7.2）

※ 同居の家族について回答があった 270 名の結果

（出典 宮川雅充・濱島淑恵、2017、高校生の家庭生活と学校生活に関する調査報告書—高校生ヤングケアラーの実態調査—）

（中略）

## 経済的な問題

ひとり親の世帯や祖父母と同居する場合にヤングケアラーが多くみられることを述べたが、今度は家庭の経済状況別にヤングケアラーの存在割合をみてみたい。

家庭の経済状況について、「余裕がある方だと思う」「どちらともいえない」「余裕がない方だと思う」のいずれかを選択してもらった。その結果、経済的に「余裕がない方だと思う」と回答した場合に存在割合が高く、約 7%となった。

表 2-2 高校生から見た家庭の経済状況別の存在割合

高校生からみた家庭の経済状況	ケアをしている者（ヤングケアラー）の人数（％）
余裕がある方だと思う	44（4.2）
どちらともいえない	115（4.5）
余裕がない方だと思う	98（7.3）

（出典 表 2-1 に同じ）

これは家庭の経済状況に対する高校生の主観的な評価に過ぎないこと、すべてのカテゴリにヤングケアラーは存在していることを踏まえると、この結果だけでヤングケアラーと貧困とを結びつけることはできない。しかし、ケアをしながら、経済的困難も抱えるヤングケアラーが少なからずいることという事は重大な事実である。

(中略)

このように、家庭の経済的状況や家族形態とヤングケアラーに関連があるならば、ある特定の条件下において子どもがケアを担う傾向があることを示唆しており、これはヤングケアラーの背景に社会構造的な問題が存在していると考えられる。

(中略)

### ケアをしていることを抱え込む子どもたち

家族のケアを担うなかで、学校生活や毎日が楽しく感じられなくなり、健康面でも不安が生じてきた場合、皆さんならどうするだろうか。この事態を何とかしなければと、友人に相談したり、同僚、上司に話して仕事を調整する、または使える制度やサービスを探して相談窓口に出向くかもしれない。誰かに状況を話してストレスを発散したり、助けを求めたりするのではないだろうか。

それでは、高校生であるヤングケアラーたちは自分がケアをしていることを誰かに話すことがあるのだろうか。

ケアをしていると回答した者に、家族以外の人に話したことがあるか否かを尋ねた。その結果、「ある」と回答した者と「ない」と回答した者が半々の結果となった。

さらに「ある」と回答した者には、話したことがある相手を選択肢から選んでもらった。その結果、「友人」が最も多く、他の選択肢と比べても群を抜いていた。高校生としては身近な友人に話す機会が多いことがわかる。次いで多い回答は「学校の先生」であり、やはり学校の先生は子どもたちにとって、家族以外の最も身近な大人であることがうかがえる。

ここで注目したい点が「医療、介護、福祉の専門職」である。今回の調査結果では「医療、介護、福祉の専門職」に話した者は11名(4.0%)と非常に少なかった。身近な存在である友人や先生に話すことができれば、気分転換やストレス解消につながるかもしれない。また有効なアドバイス、情報を得ることもできるであろう。

しかしながら、彼らが置かれている状況を根本的に改善し、ケア役割を軽減もしくは解消するためには、医療、介護、福祉等の専門職による支援や関連する制度・サービスの利用が欠かせない。そこでこれらの専門職とヤングケアラーがつながり、彼らのニーズに合わせた支援がされることが望ましいが、今回の調査では、ほとんどのヤングケアラーが専門職と接点すら持っていない様子が見られる結果となった。

なお、本調査では、介護・福祉サービスの利用状況についても尋ねており、半数近

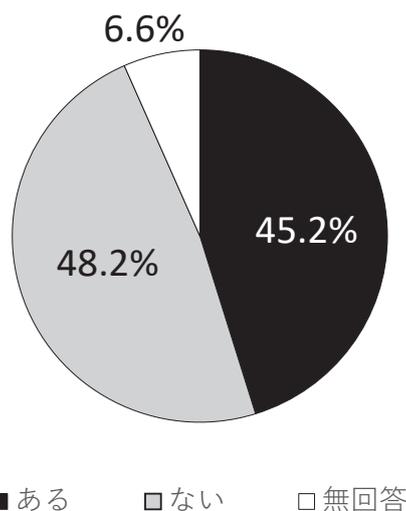


図 2-1 家族以外の人に話したことがあるか  
(出典 表 2-1 に同じ)

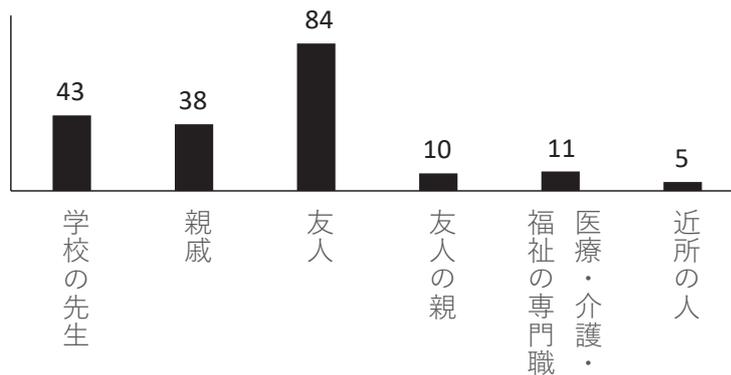


図 2-2 話したことがある相手は誰か（複数回答可）

（出典 表 2-1 に同じ）

くが利用していると回答し、利用していないと回答した者が約 3 割、「わからない」と回答している者が約 2 割であった。この結果をみると、ヤングケアラーたちの家庭にまったくサービスが入っていないわけではないことがわかる。

確かに元ヤングケアラーとの話の中では「(ケアマネジャーが定期的に来ていたが) いつも『主介護者』である母親と話していた」「(精神疾患を有している) 母親は通院していたみたいだけど、(自分は) 先生や看護師さんとは会ったことも、話したこともない」ということをよく聞く。

専門職は、患者やサービス利用者（ケアが必要な本人）へのアプローチ、また「主介護者」と位置付けられた家族とのかかわりを持つが、その子ども、孫にまで注意が向くことはあまり多くないのだろう。一方で、ケアマネジャーが常にヤングケアラーである自分を気遣ってくれて、それで学校を辞めずにすんだという話もあり、専門職による支援が有効であることがうかがえる。

読者の中で、医療、介護、福祉等の専門職の方がいたら、意識してヤングケアラー（と思われる子ども）と直接話をする機会を設けてみてほしい。そして家族内でどのような役割を担っているか、それによって、健康、学校、生活に影響が出ていないか、尋ねてみてほしい。

出典：濱島淑恵『子ども介護者 ヤングケアラーの現実と社会の壁』、株式会社 KADOKAWA、2021 年

問 1 ヤングケアラーがいる家族の傾向から読み取れることを 200 字以内で述べなさい。

問 2 経済状況別の存在割合から、ヤングケアラーと貧困との関係について 200 字以内で述べなさい。

問 3 問 1 と問 2 を踏まえて、ヤングケアラーに対してどのような支援が必要か、あなたの考えを 600 字以内で述べなさい。